《ICD国際会長を歴任して》

ICD国際会長（2020，2021年度）を歴任して

ICD元国際会長
愛知学院大学名誉教授

千　田　　彰

●抄　録●

本稿では、私が2006年からICD国際理事として、また2020年、2021年に国際会長を務めた際に得た国際理事会、国際本部の活動について自身の経験の範囲で述べた。本稿は公式のものではないが、却って日本部会フェローには身近なものとして、興味を持って頂けると考えている。国際会長就任直後に、COVID-19の世界的蔓延によってICDも多大な影響を受けた。100周年祝賀会は中止になり、世界各部会への会長訪問も果たすことが叶わず、国際会長の責任を果たすことができなかった。また私の会長任期も異例の２期２年となった。私は国際本部と各部会間、各部会間の交流を増すこと、各フェローがOne Teamのメンバーとしてより高い連帯感を持つことを提案してきた。この提案はCOVIDの「プラス影響」でもあるオンライン活用の普及を通して周知、支持されたと考えている。ICDの今後100年に向けた発展を期待している。

キーワード：国際会長、国際理事、国際理事会、本部事務局、ワンチーム

Ⅰ．はじめに（ご挨拶）

ICD日本部会フェローの皆様に、ICD国際会長（International President）、本部役員を務めた際の多大なご支援に感謝申し上げる。また2020年に日本（名古屋）で開催予定であったICD創設100周年記念祝賀会・2020年度国際理事会について、COVID-19による世界的危機により結果的に中止となり、種々ご迷惑をおかけしたことをお詫びする。このCOVID-19による混乱の出口は未だ明らかではないが「如何に付き合うか」を前提に、ICD国際本部および各部会の活動も段階的に回復、前進している。

過日、国際会長として経験したことについて、実態を含めて紹介するようにと広報委員会から依頼があった。実態の紹介となると日本部会公式機関誌に相応しくない内容になりかねないが、一方では日本部会フェローが国際本部、国際理事会についてより身近に感じるのではないかと考え、国際会長および国際理事を務めた間に感じたこと、知り得たことを率直に述べる。

Ⅱ．国際理事就任から国際会長就任へ

私は2020年と2021年の２期に亘り国際会長を務めた。世界大戦などの戦乱期を除いては、国際会長を２期連続務めたのは異例だそうだ。初代国際会長Dr.Andres O.Weber（ハバナ・キューバ）から数えて、第92、93代目の会長になる。

私が日本部会選出の国際理事（International Councilor）になり、すでに国際理事であった佐藤吉則マスター（第27代日本部会会長）と共に国際理事会（International Council Meeting）に出席したのは、2006年10月（米国ラスベガス開催）である。当時日本部会の国際理事は、森山徳長マスターと佐藤吉則マスターの２名であったが、森山マスターが国際本部役員に選出されたため、その代替として私が日本部会から選出された（当時は日本部会から２名の国際理事が選出され、またその中で１名が本部役員となると１名が補充された。日本部会からは２名とする根拠が曖昧であり、また役員を部会選出の国際理事として見做す

か、否かも定かではなかった。その後規則が改正され、各部会からフェロー数に応じた国際理事を選出することになり、現在日本部会から１名が選出される）。

国際理事として初めての理事会に出席するため、巨大なMGMグランドホテルで会場を探しつつ長い通路を歩いていると、同じく国際理事と思われる人が先を歩いていたので声がけした。奇遇にもその人物が後日国際会長を務め、現在は国際事務局長（Secretary General）を務めているDr.Joseph Keneallyであった。彼も会場も探していたようで、二人で会場を探し当てた。以来Dr.Keneallyとは個人的にも親交を深めている。

国際理事会は、執行部や事務局のメンバーを中央に「ロ」の字に席を配置し、姓の頭文字のアルファベット順に着席する。したがって私（Senda）は、代々の国際会長（Dr.Shick2009年、Dr.Sideman2010年、Dr.Siroky2012年）や編集長の（Dr.Sydney）、また台湾部会（当時）の古参国際理事Dr.Shiauに「挟まれる」形で着席し、会の進行などのアドバイスを受けることができた。しかし役員選挙などでは両隣から「自分が立候補するのでぜひ私に１票を」と耳元で囁くので対応に困惑したこともあった。

国際理事になって、私自身は国際会長への「道」(副会長Vice President、次期会長President-elect、会長Presidentへの昇任）に就くことは想像すらしていなかった。しかしある時（2015年）、第90代（2018年）国際会長を務めたニュージーランドのDr.Clive Rossから「私が国際会長になるときに、千田に次期会長になってほしいのでぜひ副会長に立候補して欲しい」と強い要請があった。

私にとっては唐突であり、なぜ私なのだと自問したが理解できなかった。後日、他の国際理事に尋ねたところ、シドニーでの国際理事会で、私がアジア諸国のICD活動を如何に発展させるか？ という発言の趣旨が理事たちの注目を得たからだと聞かされた。

その後Dr.Rossほか数名の国際理事の推薦を受け、また日本部会会長や役員の了解を得て、最終的に立候補することを受諾した。国際本部役員の選任は、選考委員会で候補者を挙げ、最終的に理事会での投票で決する。私の国際「副会長」就任も、規則に従いアイルランド・ダブリンでの理事会で審議・評決されることになっていた。しかしダブリンでの理事会が近づいたとき、当時の本部事務局長Dr. John Hintermanから「副会長立候補を取り下げ、米国部会推薦のDr.Bettie McKaigに譲った方が良い。ここで争えば、将来的に米国と日本部会の協力体制も難しくなるだろう。米国部会はDr.McKaigの後任に千田を推す」と連絡があった。結果的にこの提案に従い立候補を辞退することになった。

しかし辞退はあまりも理事会・選考委員会（Nomination Committee）直前であり、正式な宣言はダブリンでの選考委員会・執行部委員会（Executive Committee）での面接時になった。推薦者Dr.Rossには前日に夕食をしながら経緯を説明し、深く詫びた。選考・執行部委員会のコーヒーブレイク中に「今ならまだ間に合うので辞退を取り消して立候補しろ」と複数の理事が耳元で囁いた。Dr.Rossはじめ多くの国際理事そして日本部会役員には大変な迷惑をかけてしまった。このような経緯があって米国部会のDr.McKaigがダブリンで国際副会長に選出された。この立候補と辞退を巡り、米国部会と他部会国際理事間には種々な確執があることを実感した。しかし米国部会は大きな影響力をもつだけではなく、強大な実行力をもつことも事実であって、米国部会とは緊密な協力体制を築くこと大切であると感じた。またこの件を通し、多くの国際理事と水面下ではあるが率直な意見の交換ができたと思っている。

余談であるが、Dr.Bettie McKaigは2019年の国際会長を務めた後、デンバーの空港内で倒れ急逝した。彼女は優秀な人であって、ICD改革に大きく貢献した。とくに規則、規程の改正に熱心で、規則の矛盾点を細かく指摘しながら国際会長職に取り組んでいた。私はICD公式言語が母国語ではないからと文言に関する議論は避けていたが、今思えばこれら難問の解決に積極的に取り組んだ彼女の熱心さに敬意を表したい。そして私が国際会長になって、彼女が整備してくれた規則や行動目標を基本にして「文言から実践へ」、「議論から行動へ」を唱えることができた。

Ⅲ．国際会長に就任して

前述の通り、国際副会長、次期会長の段階を経て、2019年10月26～30日イタリア・ミラノでの国際理事会で国際会長に就任した。国際理事会直後には通例に従って早速執行部委員会が開催され、今後の会議日程や理事会で提案された事案への対応について話し合った。これとは別に、毎年１月～２月に定例執行部委員会が米国内で開催される。次期会長、副会長、前会長、財務、編集長、事務局員が出席する。また必要に応じてゲストも招聘する。会議日程の冒頭に半日程度を費やしてブレインストーミング（一種の集団発想手法）が行われる。ブレンストーミングは私にとっては元来苦手であり、加えてこれを英語で行うので必然的に沈黙時間も多くなる。Dr. McKaigが国際会長を務めた際には、ICDフェローでもある会議進行の専門家を招聘した。この専門家の指導で参加者の全員に多くのレポート（例えば将来のICDを考え、50年後の執行部宛の手紙に書くなど）が課せられた。

ミラノでの理事会で国際会長の正式な指名を受け、会長メダル（徽章とチェーン）の引き渡し式が理事会２日目の昼食会で行われた。また他役員と共にICDへの貢献を誓う宣誓式も行われ、最後には国際会長としての抱負も述べた（図１、２）。

ミラノはイタリアでも有数な観光地で、理事会の会場（Rosa Gland, Milano）は有名な教会（Duomo Cathedralドーモ）に隣接し、「高級」なブランド店が立ち並ぶがアーケードにも近い。イタリア・ミラノ地域でのコロナ蔓延のニュース報道がドーモ前広場から繰り返し中継された。理事会開催時にはこのような報道が、この広場から行われるなど誰も想像しなかった。私のICD国際会長就任の思い出を一層深いものにした（図３）。

Ⅳ．ICD創立100周年記念祝賀会・国際理事会開催予定について

私の国際会長としてのもっとも大きな任務の一つはこの祝賀会を、ICD誕生の地ともいえる日本で開催することであった。2020年に開催する場合には東京オリンピックと重なってしまうことが当初から大きな問題

図１　次期役員らによる宣誓式

Fig. 1　Taking the oath by International Officers elected

図２　会長チェーンの引継ぎ

Fig. 2　Presidential Chain was handed over from Immediate Past President, Dr. McKaig

図３　同伴した家内とドーモ前で

Fig. 3　Dr.Senda and Mrs. Senda at the famous “Duomo Cathedral” in Milan

図４　100周年記念祝賀会の名古屋開催を宣する日本部会役員ら

Fig. 4　The Delegates of Section 7 announced that the 100-year Anniversary Celebration would be held in Nagoya, Japan

であった。またホテルのブランド、大きさ、開催費用などについて本部事務局や組織委員会の条件を満たす会場を東京に求めることができず、名古屋開催案を台北での理事会（2017年11月開催）、組織委員会に提案した（図４）。

しかし東京オリンピックはCOVIDで2021年へと延期され、オリンピックの開催可否を「道標」としていた。記念祝賀会も一旦は延期することになったが結果的に中止せざるを得なかった。「COVIDによって」という言い訳はできるが、100周年を世界のフェローと共に日本で開催できなかった責任と無念さは痛切に感じている。この無念さ、喪失感は約５年かけて綿密な計画を立案してきた国際本部事務局、執行部委員会、組織委員会にもある。また開催予定のホテル、イタリアや日本国内のイベント会社、大小の宴会開催予定施設、国内外の旅行業者などにも大きな損失を与えた。キャンセル料については私が東奔西走し、きわめて低額に抑えることができ、「国際会長の功績」として讃えられたが、私にとっては素直に喜ぶべきなのかどうかは疑問であろう。またいくつかのスポンサー企業および多数のフェローも、祝賀会に寄せた浄財をそのまま残して頂けて有難く思っている。

Ⅴ．終わりに（国際会長としてのゴールは？ 今後期待することは？）

私の国際会長としてのGoal（ゴール：目標）には、この100周年祝賀会開催のほか、議論から実践へということ、本部と部会、部会間の連携をより密にして世界のフェローがICDという「大きな傘」のもとでの一体感を高めることがあった。ICDは国際連盟組織とは異なり、各フェローが直接国際組織ICDの構成員である。

私の会長に就任当時、すべての組織に「One Team」の考えが大切であると言われた。ラグビー日本代表はメンバー各々の出身国、ラグビーに関する背景などが異なるが、「同じチームのメンバー」という結束のもとで「チーム力」を世界に見せてくれた。私もICDの発展に「One Team」がキーワードになると訴えた。この提唱に多くの賛同があり、国際本部、部会間、フェロー間の連携が深まった。日本・韓国・台湾の３部会姉妹提携締結もその例である。また本部事務局長が直接各部会執行部とオンラインで会談してくれるようになった。

国際会長の重要な任務の一つに各部会への訪問がある。しかし私は韓国部会（2019年12月）とミャンマー部会（2020年１月）を訪問しただけであり、中国部会、ヨーロッパ部会、カナダ部会、米国部会その他への訪問はキャンセルしなければならなかった。その意味では成績が良くない国際会長であった。しかし一方で、オンラインでの執行部会議や本部事務局との連絡は頻繁に開催された。オンライン利用による便利さを実感した。また部会訪問の代わりに多数のビデオメッセージを制作し、これらの制作のため私の部屋はスタジオ化した。さらに長年の懸案であった本部事務局移転問題も、この期間に再浮上したがWeb上に置くことで解決し、誰もがいつでもアクセスができることになった。オンライン活用はCOVIDのおかげとも言える。

以上私が国際会長として経験したことを思うままに述べさせてもらった。2023年の国際会長は韓国部会の国際理事Dr.Chang Ho-Youlが務める。彼はとても優秀でかつ若く、私もかねてから期待していた人物である。ICDをしっかり将来に導いてくれると信じている。

日本部会フェロー各位におかれてはICD国際組織、One Teamの一員であることに誇りもち、ICDの新たな100年に向けてご活躍されることを心から祈念する。

To Serve the ICD as the International President ’20 & ’21

ICD Past International President
Professor Emeritus, Aichi Gakuin University

Akira SENDA, D.D.S., Ph.D., F.I.C.D.

In this paper, I described the activities of the ICD main office and the council meeting, which I experienced when I served as the International Council from 2006 until 2021 and the International President in 2020 and 2021 within my personal scope. Therefore, this paper may not be an official paper nor report, however, I think it may be interesting paper for ICD fellows from the Japan Section because I described about realities. Immediately after I took my position of the ICD International President, the COVID-19 happened and spread all over the world, and the ICD organization was also affected by the world crisis. We had to decide to cancel the 100 Anniversary Celebration supposed to be held in Nagoya, Japan in 2021. And I was never allowed to make “Presidential Visitations” visiting to each ICD Sections and I had to cancel my air tickets traveling to the Sections during my presidencies. Therefore, I am very sorry for not completing my responsibilities of the President. In the history of ICD, I have unusually served as the International President for 2-term (2-year) which is also because of the world crisis. COVID-19 has affected the world not only in bad ways, but also in good ways that is more employing “ONLINE” meetings and communication of people in the world, and ICD has been getting these benefits. As I have strongly recommended and emphasized to all officers and the International Councilors to promote communication between the Central Office and each Section, and between Sections, I believe that employing online procedures may enhance these communications. I would like all fellows from all over the world to recognize that we all are members of “One Team under the One Big Umbrella” that means we are in one team even though we are coming from different countries and careers, are all dentists serving health and peace of all people in the world. I hope the ICD will keep developing in next 100 years.

Key words：International President, International Councilor, International Council Meeting, Central Office, One Team